

4

下顎骨関節突起骨折の処置と予後に関する
臨床的検討

(八王子・口腔外科)

半田 亜津志、小川 隆、高尾 直伸

原口 浩見

(口腔外科)

工藤 泰一、千葉 博茂、内田 安信

下顎関節突起骨折はその解剖学的、機能的特殊性のため治療後にも顎機能障害を後遺する場合があります。診断および治療法の選択には熟考を要する。今回我々は当科独自の治療用チャートに基づき治療を行った症例について、その適応症と臨床的評価に考察を加えたので概要を報告する。

〔対象〕過去 2 年間に八王子医療センター歯科口腔外科を受診した関節突起骨折 20 例を対象とした。

〔結果〕(1)受傷部位は関節突起頸部骨折 11 例 (52、4 %)、様態は偏位骨折 10 例 (47、6 %) が最も多かった。(2)観血的処置を行ったのは 9 例で、このうち 7 例は関節突起基底部分骨折例で関節包は開放せずに処置した。2 例は関節突起頭部転位脱臼例で関節包を開放し処置した。(3)非観血的処置を行ったのは 11 例で、このうち関節腔洗浄療法により処置したのは 8 例であった。3 例は偏位が全く見られなかったため放置とした。(4)上記各治療法による予後に大差はなくいずれも良好であった。

〔考察〕我々は低位（基底部分）骨折例に対しては関節包を開放せずに整復処置が可能のため、原則として観血的処置を行っている。しかし高位（頸部、頭部）骨折例では関節包を開放しなければ整復困難な場合が多いため、非観血的処置を第 1 選択としている。その理由は、関節包を開放することで関節周囲組織に加える手術侵襲は著しく、障害が後遺する可能性が高いと考えているからである。その際当科では従来の顎間固定法による整復処置は行わず、消炎、鎮痛、関節腔内の血腫の除去および潤滑を目的とした関節腔洗浄療法を行い、受傷後早期より機能を積極的に改善させるよう努めている。今回の結果から本法による予後に全く問題はなく、臨床的メリットは高いものと思われた。しかし高位で骨片偏位の大きな症例では咬合状態の改善は得られず観血的処置が必要であった。今後更に長期的観察を含め、検討を進めていく予定である。

5

外歯瘻の臨床的検討

(霞ヶ浦・口腔外科) ○井上 雄、山田容三、

本田一文、高森基史、松川 聡

(口腔外科学) 下川千可志、工藤泰一、

千葉博茂、内田安信

(霞ヶ浦・病理部) 草間 博

外歯瘻は菌性化膿性炎が顔面皮膚に排膿路を形成するもので、菌性病変との関係に気付かず治療され長期間症状の改善がみられない場合がある。1990 年 4 月より 1994 年 3 月までの過去 4 年間に霞ヶ浦病院歯科口腔外科を受診した 12 症例について臨床統計的に検討した。

年齢は最年少 18 歳から最年長 77 歳までで平均 44、0 歳であり、各年代に広く分布していた。性別では男性 11 例、女性 1 例と男性に多くみられた。

主訴は排膿 4 例、瘻孔部周囲の硬結 3 例、腫脹 2 例、審美障害 1 例、その他などであった。

病期期間は最短 1 カ月から最長 20 年にわたり、3 年以上経過して来院した症例が半数近くを占めていた。

当科来院前に受診した診療科では皮膚科、外科、歯科が各々 3 例などで他に耳鼻科、形成外科、内科などを受診しており、そのうち複数の診療科を受診していたものが 3 例あった。

原因歯は下顎 10 例、上顎 2 例で、左右差はなく歯種別では下顎第 2 大臼歯に起因するものが 5 例と多くみられた。

瘻孔部位との関係では下顎臼歯に起因する 8 例中頬部に 6 例、オトガイ部 1 例、顎下部 1 例、下顎前歯に起因する 2 例はオトガイ部に、上顎臼歯に起因する 2 例は頬部に瘻孔が形成されていた。

原因歯疾患は慢性根尖性歯周炎に起因するものが 9 例で多く、他に智歯周囲炎 1 例、骨髓炎 1 例などであった。

治療は原因歯の抜歯と同時に瘻孔閉鎖手術施行例 4 例、原因歯抜歯後、瘢痕形成手術を施行したもの 2 例、経過観察中のもの 3 例などであった。

本疾患は病期期間が長く慢性経過をとることが多く、また患者の口腔衛生への関心が低い場合が多いなどのことから原因歯を保存することが困難な症例が多く、原因歯の処置に関しては今後の課題と考える。